

僕は東ティモールで、村の人と一緒にコーヒーの農作業をしてきました。その中で、フェリペ・バボさんが言っていた「私たちにコーヒーしかないから」という言葉が、今でも心に残っている。

僕は東ティモールの人はどんなモチベーションをもってコーヒーを栽培しているのだろうと疑問をもっていた。彼らは自分が育てたコーヒーをトレーダーに売っている。自分達が育てたコーヒーを買った僕ら消費者が何を思って買ったのか、どんな顔をして飲んだのか、飲んで何を思ったのか、などは知る術が無い。だから、きっと実がなったらそれを摘み、袋に入れて業者にお金と変えてもらう。それだけのものであり、この豆はお金に変わるものだという認識しかないのだろうと思っていた。そういう認識に成らざるを得ないと思っていた。だからこそ、僕は農家の人が何を思ってコーヒーを栽培して売っているのが気になっていたのだ。

僕はバボさんに「どうなったら、もっといい人生になると思うか」と聞いた。バボさんは、「私たちにコーヒーしかないのもっとコーヒーを買ってもらいたい。その為にもっとしなければならぬ事が沢山ある。」と仰った。その答えは僕にとって意外な答えであった。彼らはしっかりと誇りをもってコーヒーの栽培をしていた。自分達のコーヒーに足りないものも理解している。彼らは僕らに「コーヒーの豆を乾かす時の水分値は 10%だ」とか「アフリカンベットというコーヒーを乾かす台がもっと沢山欲しい、一家に一台欲しい。」など教えてくれた。彼らがここまでコーヒー栽培について熱心に勉強していると思っていなかった。彼らが誇りをもってコーヒー栽培に取り組んでいるのは、支援している PWJ(ピースウィンズ・ジャパン)が彼らにこの豆にはどんな価値があって、どんなにいいものなのかを長年に渡って教えてきたからなのだろう。彼らは自分達のコーヒーを飲んで人の顔が見えなくても、もっと美味しいコーヒーを提供しようと、もっと美味しいと言ってもらおうと、もっと買ってもらおうと努力していたのだ。 「今何をしている時が一番楽しいか」と聞いた時も、バボさんは「良くも悪くも私たちにコーヒーしかないのでコーヒー作業をしている時が一番楽しい」と仰っていた。バボさんの言っていたコーヒーの作業をしている時が一番楽しいというのはとてもいい事だ。実際彼らと農作業をしている時、村の人の笑顔は絶えなかった。僕らが客観的に彼らを見て僕達、私達より貧しいからきっと不幸なのだろう、可哀想だ、などと勝手に決め付けてしまうのは違うと思った。彼らは彼らの生活の中で沢山の幸せを見つけて暮らしている。だから実際おじいちゃんおばあちゃんから子供までみんな素敵な笑顔をもっていた。彼らは自分達の村が大好きで、彼らは自分達の職業を選ぶ事も出来ずに小さい頃からコーヒーの仕事を手伝っている。それなのにも関わらず、文句一つ言わず自分達の仕事を愛して、誇りを持って、もっといいものを作ろうと勉強していた。

日本では自分の職業に誇りをもってその仕事が大好きだと言って必死に勉強するような職に出会っている人が何人いるだろうか。日本には毎朝会社に行くのが憂鬱で仕事をするのが嫌いな人が何人いるのだろうか。そのように先進国の日本と彼らを比べた時に彼ら心の豊かさが大いに分かる。そんなコーヒーが大好きで、大切にしている、もっといい物を提供しようとしている彼らはとても素敵に思え、話を聞いていく内に僕の彼らへの思いは尊敬へと変わった。

僕ら先進国の人も、世界最貧国の一つである東ティモールの人も国の豊かさは違うが、人間一人ひとりで見ればもちろん僕らは対等な立場だ。僕らは彼らに恵みを「与える」のではなく僕らは彼らを「支援する必要がある」のだ。水が足りない、ご飯が足りないなどと言っていた彼らの生活。平均寿命が五十歳という現実。生活を送る上で、最低限度の物が足りない生活は変えなくてはならない。自分達の手だけではその生活から脱することが出来ないなら、先進国に住んでいる僕らの助けが必要となる。

僕らはフェアトレードについて学んできた。東ティモールに行き行って感じたのは、何がフェアで何がフェアじゃないのかは他者が客観的に決めることができるものではないものということだ。だからこそ東ティモールなど途上国の人々がしっかりと教育を受け、何がフェアなトレードなのか自分達で判断する為の力をつける必要がある。今はまだ情報や教育が行き届いておらず手間暇かけて作ったコーヒーを安く買いたたかっている農家もある。そんな人々に教育や情報を提供できるのが僕ら先進国に住む人々だ。

また、先進国に住む僕らの主観的な目線で見ると「そんなに美味しくないけど農家の人の為に買おう」や「フェアトレードラベルついているから高いけど買おう」は消費者の私達にとってフェアでない気がする。それでは見えない相手に募金しているのと大して変わら

ない。彼ら途上国の人々が自立する為には「あげる」のではなく、「伝える、支援する。」事の方が大事になってくると思う。

理想的な貿易の形とは、お互いの持つ価値を交換することであり、交換がフェアなのは当たり前なのに、先進国の人々が途上国の人々から買い叩く実態がある。これを防ぐ為に始まったフェアトレード。フェアトレードは、先進国が上から目線で「買い取り価格を上げてあげる」のではなく、対等な立場で生産者を応援するのがフェアトレードだ。先進国の人々と途上国の人々は常に対等な関係にある。可哀想だから買ってあげるのではなく、美味しいものを今後も作れるように買う。彼らにやってあげるのではなく、彼らがやるのを僕らが支援する。それがフェアトレードの形だと思う。

東ティモールの人々は消費者の顔が見えなくても誇りを持ち、もっと美味しいコーヒーを作ろうと努力している。だけど、消費者もコーヒーを作っている彼らの顔や努力が見えたらそのコーヒーはもっと美味しいものになると思う。生産者の彼らも消費者がコーヒーを飲んで美味しいと言っている声や顔を見たらもっと美味しいコーヒーを作ろうというモチベーションへと変わると思う。そんな生産者と消費者の声を繋げることが出来たら…、そこにはどんな未来が広がるだろう。

僕らはもっと東ティモールを知ってもらう必要がある。少しずつでも知って興味を持ってもらうために、東ティモールのコーヒーを飲んだことがない人に彼らのコーヒーを飲んで貰いたい。それはもちろん貧しい彼らの為に買ってあげてくださいなんかじゃない。コーヒーしかないという熱い想いで自分達の生活をかけてコーヒー栽培に食らいつく彼らのコーヒーをもっと沢山のの人に知ってもらいたい。そして美味しいと言ってもらいたいのだ。

HR304 三國典明

